

3) 遅発性に第四脳室内出血を来した外傷性中硬膜動静脈瘻の1治験例

一特に血行動態について一

日高 徹雄

(小山市民病院)  
脳神経外科

外傷性中硬膜動静脈瘻の56才、男性例を経験した。経時的に、瘻からの短絡血流量の増大に伴ない、遅発性に第四脳室内出血を生じた。これは流出静脈系の一つである Petrous Vein が逆行性に造影された所見から、解剖学的に静脈圧亢進による第四脳室内出血と考えた。文献上、保存的療法を行った症例に、硬膜外血腫を含め、くも膜下出血、硬膜下血腫脳内出血の報告がある。動静脈瘻が硬膜外に存在するにもかかわらず、硬膜より内側に病変を生じる原因として、本症例は静脈圧の亢進が関与したことを示し、また動静脈瘻に隣接しない遠位部に出血を呈したこと等、興味ある症例と考え報告した。

本症例に対し、血管内閉塞術を行った。

4) 外傷性頸部内頸動脈閉塞症

一上行性血栓より進展した中大脳動脈血栓で発症した一例一

東 莊太郎・藤井 博之 (金沢大学)  
宇野 英一・山口 成仁 (脳神経外科)  
藤井登志春・山本信二郎

中大脳動脈血栓による片麻痺で発症した外傷性頸部内頸動脈閉塞症を経験した。27才の男性で、敷居につまづき右上頸部をベッドの柵に打撲し、4日後突然左片麻痺が出現し当科受診した。右総頸動脈写で右頸部内頸動脈起始部の完全閉塞を、椎骨動脈写で右後交通動脈を介する側副血行と右中大脳動脈の M2 に血栓像を認めた。発症3日目の CT で右中大脳動脈領域の低吸収域が出現し、その後の椎骨動脈写で右中大脳動脈の段階的再開通を認めた。本症例は、頸部内頸動脈の完全閉塞後、内頸動脈内に上行性血栓が形成され、これからの遊離血栓が中大脳動脈に塞栓し発症したと考えられ、外傷性内頸動脈閉塞症の発現機序の一つを示唆する。

5) CT スキャンによる頭蓋内石灰化(第2報)

郭 隆燦・竹内 文彦 (金沢医科大学)  
伊東正太郎・山本 信孝 (脳神経外科)  
中村 勉・角家 暁

頭蓋内生理的石灰化は加齢の指標となりうるが、松果体部、側脳室脈絡叢、大脳基底核の順に多い。今回は側脳室脈絡叢と大脳基底核の石灰化について、年齢、性、左右差を検討した。対象は頭部単純 CT スキャンを行った連続2877例で、病的石灰化は除外した。脈絡叢石灰化は

男性が女性より多く、(60代、70代では有意)、男性では10才未満は0、10代前半で8.9%、以後年齢と共に増加し、70代で78.6%となり以後横ばいとなる。左右差はない。女性では15才未満は0、10代後半は15.2%、以後年齢と共に増加し、80才以上では71.6%となる。左右差はない。大脳基底核石灰化は女性の方が男性より多く、年齢と共に増加するが、左右差はない。

6) 誘発電位と背景脳波の合成ダイナミック・トポグラフィの臨床応用

後藤 恒夫・米谷 元裕 (秋田大学)  
三浦 俊一・古和田正悦 (脳神経外科)

誘発電位の経時変化を背景脳波と同時に観察するために、両者を合成した25チャンネル・ダイナミック・トポグラフィを試みた。

平衡型頭部外基準電極を用い、覚醒・閉眼時に閃光とクリック音を両側同時に与えて記録した誘発電位を零交叉法で測定し、背景脳波ではδ波常域の等価的電位( $\sqrt{P\delta}$ )を求めそれらを Z statistics で解析した。次に異常 Z value を抽出し、それらを  $\sqrt{P\delta}$  トポグラフィ上に dotted area として投射し、2 msec 毎のダイナミック・トポグラフィとして表示した。

現在のところ、主に前頭前野の障害による大脳半球への影響を評価する目的でこのダイナミック・トポグラフィを試みており、その応用例を16mm映画で供覧した。

7) Direct coronal section 脳血管 CT の有用性

一脳血管病変のスクリーニング法として一

新谷 俊幸・中川 俊男 (市立函館病院)  
伊藤 丈雄・清水 一志 (脳神経外科)  
平井 宏樹  
竹下 元 (同放射線科)  
田辺 純嘉・端 和夫 (札幌医科大学)  
脳神経外科

脳血管病変に対する、direct coronal section での脳血管 CT の有用性について報告した。

検討の結果、脳動脈瘤に対しては、長径5mm以上のものは検出可能。脳梗塞に対しては、主幹動脈の閉塞は検出可能であると考えられた。

問題点としては、positioning, artifact, spatial resolution があげられた。

しかし、本法は非侵襲性であるため、今後、未破裂動脈瘤及び、閉塞性血管障害のスクリーニングとして外来においても容易に利用しうるものと考えられた。